3. ポール・クローデルの観劇記(道成寺)

能は、構えや形をすべて単純化し、動きを単純化し、動きを緩慢にする。動きは、絶えざる繰返しと緩慢さにより、極度に重要な意味を帯びる。想像力と意志の訓練一時間余、精神は釘付けになる。例えば柱の傍らに座った僧が、自分に向ってくる吸血鬼を凝視し続ける。楽士の咆吼。爪先が上がる。鼓を打つ。爪先が下りる。静まり返る。突如全身を折り曲げる。飛びかかろうとするかのように。再び静寂。長い不動の間。かようにして舞台一巡に一時間。実に劇的。—この間見つめる方は、文字通り瞬き一つせずに不動の姿勢を保つ。一私は誘惑の突然の襲来を、悪魔との長い孤独の戦いを、迫り来る危機と死とに耐えている、(ポール・クローデル「道成寺を見て」)

能は、観客に緊張を要求する精神劇である,

4. 聖徳太子の「和」

聖徳太子は、世界の争乱紛擾の転換期に現れ、神仏一体・王法一如を強調して、わが国に平和を確立する方法を教えた。その基本が十七条の憲法で、冒頭第一条に衆議をつくして平和の樹立を求めるべきこと、第二条に道義の乱れを世界宗教である仏教に学ぶべきこと、第三条に承詔必謹、最後は皇命に服すべきことを命じた。

その上で、礼の尊重・絶餐棄欲・勧善懲悪・賢哲登用・群卿早出・絶忿棄瞋・信賞必罰・勿収斂民・勿妨公務以非聞・勿嫉妬・背私向公一勿使用繁民・必宣論与衆　など平和の樹立に必須の具体的心得を示している。

仏教とバハイ信教についての パネル・ディスカッション

バハイと仏教

シュエリン公子

今日の日本において、現代社会に発生するさまざまな社会的、経済的、倫理的な問題を鑑みるとき、個人や国家や世界社会がいかに精神的支柱を必要としているかを考えさせられます。そこで本日は仏教国である日本にいまだ知られぬバハイの存在とその精神的に斬新な教義をこれからの日本社会の精神的支柱となるものとして考えるための資料を提供したいと思います。

仏教はインドネパール地区に発祥し、2500 年間主としてアジア地区で信仰され、地球人口の約 5 分の 1 の信者を持ち、その平穏と安らぎの生き方は東洋の心に深い影響を与えてきました。

日本でも 1400 年前の紀元 594 年に推古天皇の下、聖徳太子が仏教を導入して以来、仏教は日本人の精神的骨子の一環となってきました。

バハイは人類が地球社会に突入しようとしていた 19 世紀後半にペルシャのシラズ及びヌール地方に発祥し、1844 年の発祥以来 163 年の間に世界 210 カ国に広まり、182カ国に行政組織を持つに至った世界宗教でその教義と実践においてこれまでのどの宗教にも見られない国際性を持つた精神的、社会的教えを持っています。この二つの宗教を私が、拙学ながら比較し考察したことをここに述べさせていただきたいと思います。

バハイ信教の聖典に見られる仏教については、二人の顕示者、バハオラとバブは特に仏教について言及していません。この理由はその信徒に仏教者がいなかったためであるとバハイ信教の守護者は述べています。バハオラの長子で信教の中心と呼ばれたアブドル・バハは“仏陀はキリスト、モハマッドと並ぶ神の顕示者であった”こと、“バハオラは仏陀ほか、これまでの顕示者の再来であり、彼らが予言したことを成就する顕示者であった”ことを明言しています。

このパネルにおいては仏教の中心的教えとその予言、仏教とバハイの類似点、および相違点について考察し、類似点については、顕示者としての共通点、教えの普遍性、神の概念、死後の生、代表的な精神的教え、また、相違点については輪廻、黄金率、使命の違い、救済の対象の違いなどの観点から考察したいと思います。また、仏教とバハイとの関連などを通じてバハイと仏教がいかに一体性を持つかということと今、仏教界に新し

い命を吹き込むことのできるのはバハオラの啓示以外にはないということを提言したいと思います。

バハイと仏教

仏教は紀元前563年にネパールに起こり、アジア地区に広まり、2500年間東アジアの人々を和し、教育し、東洋の心に深い影響を与え、近代にはその影響は西洋にも及び、平安と安らぎの生き方は多くの人に共感を与えています。 仏教に帰依する人は地球人口の約1/5といわれ世界20カ国にその信者を持っています。主たる仏教国はタイ、ベトナム、スリランカ、ミヤンマー、カンボジア、中国、日本などです。

バハイ聖典中に見られる仏教

バハイ聖典中、仏教に関して述べられている部分は多くはありません。

1. アブドル・バハは ’仏教は新しい宗教を築いたが、その機構は完全に破壊されて、仏教の信条と儀式は仏陀の基本の教えに従って継続されていない。仏教の始祖はすばらしい魂で神の一体性を人間の間に確立したがそれは次第に消滅し、無知な習慣と儀式のみが頭をもたげ、ついには偶像とイメージの崇拝に終わってしまった。(質疑応答集)と述べています。

2. アブドル・バハはまた、“仏陀のこの世における主権は終わり、彼の周期は完遂した。”（アブドル・バハの書簡1915、V2,p.469）と述べ、

3. ショーギ・エフェンディは“仏陀はキリストのごとく神の顕示者であった。しかし、彼の信者はその聖典を所有していない。”(1941・12・24 あるNSAへ宛てて)

4. ショーギ・エフェンディ“バハオラ、バブ、アブドル・バハが仏教徒にあてて書かれたまたは講話されたものがない理由は、バブとバハオラの信者が当時、極東には行かなかったためであろう。”と述べられております。

5. 万国正義院 “バブ、バハオラの原典に仏教徒について述べられた特に顕著なものは見当たらない。アブドル・バハとショーギ・エフェンディは仏陀を神が顕示者として認め、仏教を神に根源を持つ宗教である”と述べている。

6. 万国正義院 “アブドル・バハはゴータマ・ブッダは顕示者であると明確に述べている。また、1941年4月14日に守護者はこう述べている。’顕示者バブ・バハオラの聖典に参照できないものは歴史と宗教の学徒が将来明確にし、解決する課題として残されている。”

仏陀は仏教の盛衰任期を500年ごとの5段階にわたって全体で2500年とし、その後、仏教は衰退することを予言しています。

また、仏陀の再来に関する予言を残しています。“われに従うものは数千なれどわが再来に従うものは数万、数十万であろう。”

1. 仏陀とバハオラの共通点

その生い立ち－二人とも王家の嫡男として仏陀はカービラにバハオラはヌールに生まれ、その父王は子供に対する夢占いを行っている。世俗から守られた生活をし、幼少から顕示者としての特異性をあらわしていた。生来の神秘的な知識を持ち、学ぶことなく精神的理解に長けていて、語ったことを自己体現する力を持っており、神の顕示者としての条件をすべて備えていた。

仏陀は２９歳で、バハオラは２５歳で世俗の地位や富を捨て、神に仕え、人類を救う、より高尚な目的のために世俗の権力者や僧たちからの反対と迫害など類のない苦しみを舐め、自己を犠牲として、尚、大衆を救う教えを説いた両者は近しい親族や弟子の裏切り、(仏陀はダイバダッタ、バハオラはミルザ・ヤーヤ）にあっている。それにもかかわらず、至上の神の力を信じ、全ての衆生に手を差し伸べて精神の救いを教え人々を神の下へと導いた。

2. 教えの普遍性

両者とも、その教えは土地の言葉によって著わされたが、その教えは、魂を基本としていたため、すべての人間に理解され、生きる道しるべとされた。

3. 宣言の言葉

仏陀ー'偉大な仏陀が顕われた。征服者、世界の主、デイパンカラ。彼のために道をあけよ。無比の者、栄光に満ちたもの世界の指導者'と自己を呼んでいる。

バハオラー人の目から隠されていたその方がやってきた。神のすべてを征する主権が顕された。そのすべてを包含する輝きが著わされた。戸惑い、立ち止まることなきよう注意せよ。天より下された神の市、神に好まれた者、心清い者、もっとも高尚な天使が伴う者らが賛美して回った天国のカーバ神殿の周りを巡るよう急げ。(カーメルの書簡より)

4. '神'の概念

仏陀が現れたとき、世情は賢人や偶像を礼拝して神々と呼んでいた。これらの神と真の神を区別するため仏陀はあえて神を神とは呼ばず、第一起源と呼んだといわれる。

"おお、びくよ。生まれず，成らず、創られず、結合されぬもの（神）がある。この存在なくして、うまれ、成長し、創られ、結合するものは存在しない。この存在（神）があるからこそ生まれ、成長し、創られ、結合するものを超える存在があることがわかる。

"仏陀　バハオラは"不朽の太古から、神は言葉に表せない聖なる中で神ご自信の高尚な自己をベールで包まれて存在される。そして、それは未来永劫まで続き、神の不可知の計り知れない神秘の中に包まれて永遠に存在なさる。"　と述べられている。

また仏陀は、"われはブラマなり。われは偉大なブラマなり。神々の王なり。われは創造されたものではなく世界を創造した。われは世界の主であり、われは創造し、変革し、誕生を授ける。われは全創造物の父なり。"この言葉で仏陀は神の力と属性を反映し、神を具現している。

同じことがバハオラの次の言葉についても言える。

"わが恩寵はすべてを超えるものであり、われは、精神の世界より聖なる高貴の宝石（神の顕示者たち）が現れるように計らった。"

"われは神なり。神自身なり。神はわれなり。われ自身なり。"

5. 神と顕示者

バハオラは神の顕示者の２つの任務、ひとつは神の地位にあるもの。他の一つは人間の地位をもつもの、について語っている。

"神の顕示者のひとりが'われは神なり。'といった場合、彼は真実を話しており、それに疑いはない。なぜならこれまで繰り返されてきたことだが、彼等の啓示、属性、名称、を通して神の啓示、名称、属性は世界に顕わされたからである。もし彼らが"われわれは神の僕である。"といったとすれば、これも明らかで議論の余地のない事実である。なぜなら、彼らはほかの誰にもまねのできないほどのこの上ない奉仕の地位に身を置いたからである。

仏教においても同じように神の顕示者の２つの地位についてニルマンカヤとダルマカヤという言葉で説明してある。前者は仏陀が現象界の存在として人類の救済に当たる人間としての姿をさし、後者は仏陀がサムサラやニアバナという精神界に顕われた神の具現としての姿を指す。仏陀は存在の現実の次の２つの明白な面について語っている。

1．変化と苦悩の中にあるつかの間に過ぎ行く人間世界

2．恒久的で創造的な力をもつ絶対存在、神の世界

事実、仏教はバハイ教とイスラム教につぎ、その書典に神についてはっきりとした記録を残した宗教である。仏教は神を次の言葉で著わしている。

1．至上の自己　2．普遍的意識　3．究極の実体　4．宇宙の生命力　5．絶対的な造物主

6．保護するもの　7．存在の第1起源　8．絶対的現実　9．心意　10．無　11．慈悲深い者

バハオラが神について語った言葉は比類なく多く不可知の存在、全知全能なるもの、宇宙の創造主に始まりすべての栄光と存在の源、恩寵と仁慈の御方にいたるまで多くの呼び名で神を讃えているがその内容は仏陀の言葉と一致するものに加えさらに増している。

顕示者として仏陀とバハオラに共通する点はほかのすべての神の顕示者（キリスト・モハマッドなど）にも共通する点で以下のごとくである。

1．天賦の知識を持つ。2．完全な性格を持つ　3．超自然的力をもち、奇跡を起こし得る。（いかなる質問にも答えることができ、教えたことを体現する。）4．最悪の苦難、激烈な迫害に超人的忍耐力で耐える。5．出現は前もって定められている。6．世俗的権力は一切ない。（物質に興味なし）7．啓示による聖なる書を持つ。8．出現した時代の社会的要求に応じた教えをもたらす。9．教えに精神的面と社会的面があり、社会面は時代により異なるが精神面は時代を超えて普遍で共通している。10．あらゆる人の心に訴える教えを啓示する。（魂を揺り動かす。）11．既存の法を廃止し、新しい法をもたらす。12．新しい暦をもたらす。13．創造主の意志を伝達し、自ら大教育者であることを伝え、人類に変革をもたらす。（教えは世界基準）14．出現時には少人数しか認めないが後に（宗教的）大文明を築く。

6. 死後の世界

仏陀は人の魂は死後、1万界を進むとし、バハオラは、人の魂は死後、後退逆行することはなく、前進あるのみであって、それぞれの世界は次の段階へ進むための学びやであり、人はこの世で身に着けた精神的美徳のみを次の世に持って行けると述べている。

7. 内奥の聖なる自己

仏陀は"自己のランプであれ。外部に避難を求めるな。我以外の誰にも避難場所を求めるな。心の内奥の真理をランプとしてしっかりとつかまれ。
バハオラは確信の書に“汝の心の内奥にある精神のランプに知恵の油を持って火を灯せ。”
と述べている。

8. 正しい理念の力

仏典に“人はその思いであり、思いは人の土台であり、構成であり、結果である。”人が清らかな思いで話し、行動したならば決して離れぬ影のように幸福が彼に従う。“
思いは非常に強力で一度それが発されるとそれは地球を長い間回り続ける。もし、我々の思いが清らかならばそれは行動に表されてくる。またもし、我々が不純な思いを持つとそれも不純な行動として表に表れる。

落穂集にバハオラは述べています。
“汝の思いを人類の運命（幸運）を再生することと人の心と魂を清めることに焦点をおけ。
“汝の思いを最愛のお方(神)に置け。

9. 正しい行動の結果

仏教のカルマの教義は人生の実用的なガイドである。それは、我々に自分の行いに対する道義的責任感を持たせる。われわれの行動の永続的な結果は行動に注意深さを促す。人は自分の存在に完全に責任を持たねばならない。人は自身の人間を作る。人の行動は次の段階で人が何になるのかを決める。そこで仏陀は命をあやめないこと、与えられていないものをとること、肉体の欲望などにふけらないように教えている。

バハオラもまた同じことを述べている。すべての人間は肉体的死後に彼らの行いの価値をはかられ、自分の手が成したことをすべて自覚することになる。誤りの中に生きたものはこの上ない恐れと震えに

捕らえられるであろう。何物も超えることのできないほどの恐怖の驚きに満たされるであろう。と

10. 正しいスピーチ

正しいスピーチとは、うそをつくこと、中傷、誹謗すること、残酷無常な言葉を使うこと、おろかなおしゃべりに無駄な時を過ごすこと、などを避けることである。

仏陀は”人の心意は真理の追求のために占有されるべきもの“と説いている。

バハオラは、人の口から流れるゴシップや陰口は罪の中でも大きなものであると説く。

“汝自身が罪びとである間は人の罪をささやくな。(かくされたる言葉　A＃２７)

”沈黙を守り、無益な無駄話を慎まなければならない。なぜなら舌はくすぶる火のごとくあり、過剰な饒舌は致命的な毒となるからである。物質的な火は肉体を焼き尽くすが、舌の火は心も魂もともに焼き滅ぼしてしまう。前者はほんの一時しか燃えていないが後者の影響は１世紀も持続する。(落穂集　#125)

11. 欲望と自己統制

仏陀によると人間の苦しみは終わらせることができ、人は無知に基づく渇きや欲望に終止符を打ち、自由になることができる。

バハオラは、“人間は魂をこの地上に縛り付ける鎖となるすべての物質的な欲望をやめねばならない。普通、人は自己の欲するものを手に入れることが大きな幸せをもたらすと思っている。人は、望みがかなうやいなや、次の欲望が心を満たすことを忘れている。

これに終わりはない。なぜなら、人はより大きくより偉大な欲望を追い続けるからである。

そして物が手に入らないと人は不幸に陥り、欲望を満たすことを許してくれない神を非難する。しかし、唯一、人が持つべき欲望は心の平穏と神の意思と喜びに従うことである。“と述べている。

12. 怒り

仏教の教えは、“怒って、憎しみを生み出す人、生き物に害を及ぼす人、うそをつく人、自分自身をあがめ他を見下す人、人は彼に追放することを知らせるべきである。”(東洋の聖なる書 10：2,21 より)　いかなるときも憎しみは憎しみによって収めることはできず、憎しみは愛によってとめることができる。

バハオラは’怒りは肝臓を焼く。憎しみの心はより強い平和の心に置き換えよ。‘と述べている。

13. 愛

暴力についてのお説教の中で仏陀は、ある者がわれに対し、間違いを犯したとすると、われは、その者に愛の保護を持ってお返しするであろう。より意地悪が激しければ激しくなるほど、より大きな善がわれより彼に送られるであろう。

バハオラは、“愛で怒りを納めさせよ。”(落穂集)

人をして悪を善で、欲を自由に、うそを真実によって克服せしめよ。”(落穂集　125)

人は自己をすべての激情から清めねばならないと述べている。

人はその心をすべての愛着から清めなければならない。愛が人をして盲目的に過ちに陥らせ、あるいは憎しみが人を真理から追い払わないように、愛憎いずれの残照も残らないように自己の心を清めなければならない。(落穂集　125)と述べている。

14. 5つの教訓-禁止された行動

仏教では人は 5 つの教訓-禁止された行動に従うべしとある。1．生命の破壊(殺人)、2. 盗み、3．不倫　4．うそいつわり、5．強い飲み物

バハオラの法もこれとまったく同じであるがその他にも陰口、麻薬、アルコールなども禁止している。

15. 家族

仏陀によると、親は子供を守り、導き、子供は親を敬い、家族の伝統を受け継いで守っていくとある。夫は、礼儀正しく忠実で、妻を尊敬する。妻は貞操を守り、家事の責任に勤勉であることと教えてある。バハイの家族においては父は家族の生活と子供の教育のための物資を供給し、母はバハイの子供を育て

上げる。子供は親に忠誠を示し、親の安楽と生活を守るため謙虚な僕として仕えるべし。と教えてある。

16. 善性に集中すること

仏陀はその従者に愛情深い親切さと慈悲を培い、無礼者(違反者)を無視することによって反感から心を自由にすることを教えた。もしこれで効果がなければ違反者のよい特質を見ること、また違反者の行為は反感は魂を傷つけるが内奥の魂を傷つけないことを思い出すよう教えている。
同じく、バハオラは、人は必ず、よい性質を持っている。我々は人のよい性質に焦点を合わせ、悪い性質には目をつぶるべし。と教えた。

17. 争い、戦いを避けること

仏陀は彼に従うものは決していかなる種類の戦争にもかかわってはならないことを戒めた。
彼らは致死の武器を使うことを許されず、反乱や、謀反や暴動に加担してはならず、大使館の仕事でさえしてはならないとされた。

バハオラは、1890 年に彼を訪れた英国人教授に“これら無益な闘争や破壊的戦争はなくなり、やがて最大の平和が訪れるでしょう。・・・ 闘争や流血や不和はやめねばなりません。誇りは自国を愛するものにあるのではなく、人類同胞をくまなく愛するもののためのあるのです。”と教えている．また、バハオラの長子、アブドル・バハは”平和が生命であるのに対し、戦争は破壊、略奪、残虐であり、動物界の付属物であるからこれに加担しないよう戒めている。アブドル・バハの孫であり、バハイの守護者であったショーギ・エフェンディは、我々バハイは世界中でひとつの共同体であり、神に起源を持つ新世界秩序を確立することを求めている。もし、バハイが異なった政治政党のメンバーになったならば、いかにしてバハイは世界のこの和合を達成できようか。(バハイの行政の原則Ｐ．４３)と述べ、世界平和の確立のためには戦争に参加する以前に、和合の推進のために政党でも宗教でも分派したものには属さないことを教えている。

18. やさしさ

仏教は全世界を包含した教えを持つ最初の宗教である。カーストや国籍名との壁や歴史的な付属物であった階級制は取り払われた。インドにおいて注意深く守られてきた少数の特権階級はすべて仏教を通して真理をもらすものとなった。今日世界中で、仏教徒の愛はすべての生き物の生きる喜びと苦しみをともにし、暴力にはかかわらない。
仏教に心が接触した人は優しさのオーラを示し、最近まで、仏教は戦いなく、暴力なく、異教徒の迫害なく、尋問なく、魔女裁判なく、十字軍なく、異なった視点や意見に対する注目すべき偉大な寛容を教えている。

バハオラは親切な舌は人の心をひきつける磁石であり、魂の糧であり、英知と理解を与える光の泉である。戦争の思いが起きたときはそれに勝る平和の思いでそれを打ち消し、憎しみはより強い愛の思いでそれを滅ぼさねばならない。と教えている。

19. 不言実行

仏陀は“教えを語るが実行しないものは他人の牛を数えている牛飼いのようなものである。” ‘美しい色を持つが香りのない花‘は教えを生きないものにたとえるよい例である。
その著、‘かくされたる言葉’の中で、バハオラは、‘言葉が行いを超えるものは，彼の死はその生より望ましい。‘ アブドル・バハはこの概念を２つにわけ、１．思想の世界にのみ属するもの２．思想を行動に表すもの とし、行動の域に達せぬ思想は無駄である。思想の力はそれが行動に現されるか否かにかかっている。と述べた。

20. 中庸

仏教では、マジマやパテイパダの中に、’真ん中の道’すなわち、中庸についてかかれており、両極端を排して中庸の道を日常生活に取り入れるようすべての人々に教えている。
同じ中庸についてバハオラは、‘すべてに中庸を行うことは義務である。中庸の域を超えるものは何にも

有効な影響を及ぼすことはできない。中庸の境界を越えるな。汝に仕えるものを正しく扱うように。彼らのニーズに従って分け与えよ。芸術や科学のエキスパートによって誇りとされている文明はもし中庸の域を超えることを許されるならば人類に悪をもたらす。そこで、全知の神は警告され給う。中庸の境界内にあるときは善であった文明が、あまりにも過度を許されたために悪の根源となることがある。人々よ。瞑想せよ。誤りの原野にさまようことなかれ。'と説いている。

以上、佛典とバハオラの聖典中にみられる類似点の一部を比較、列記してきたが、
次に、仏教とバハオラの教えとの相違点について少し、比較してみたい。

1. 累進的啓示
バハイは過去の八大宗教を包含する概念を持っています。歴史上、顕された一連の宗教のつながりの中で神の唯一性と宗教の唯一性を説きます。
ユダヤ・キリスト教系―神を上に置き、その命、教えは天より降りるとする。
ベーダ系―神を人間の位置から魂を研磨することにより近づく対象とする。
バハオラは、神はすべての存在の元親、宇宙と万物の創造主であるとします。

2. 人類と宗教の歴史上、過去６０００年の有史はアダムの周期と呼ばれ、これからの５０万年の未来社会はその予言を成就する周期、バハイ周期と呼ばれます。仏陀は予言周期(アダムの周期)のうちにあり、バハオラは成就の周期(バハイ周期)のはじめに位置しています。仏陀の言葉によると'われは種々の誕生を思い起こし種々の種族に現れ、いろいろな名を名乗った。'と延べ、宗教の一体性を説いています。仏陀の再来を小乗仏教では'阿弥陀仏'とよび、大乗仏教ではメイトラヤ'弥勒菩薩'とよぶと推察されますが、その真偽はこれからの研究者の課題であります。

AB: 仏教典にバハオラの出現についての予言がある。(AB の書簡)
SE: 仏教徒にとってバハオラは仏陀の再来、5 番目の仏陀(仏陀、キリスト、モハマッド、バブ、バハオラ)にあたる。時が満ちたとき、メイトラヤ(万国普遍の友情の仏陀)が現れ、神の無限の栄光を顕わす。(仏陀の再来＝無量光=神の栄光=バハオラ) (GPB P95)

アナンダよ。聴け。
・大惨事が世界を脅かし、忠実なるものがダルマを実践するのが難しくなるとき、
・大戦争、殺戮、不正、腐敗が地球上をすべて覆ったとき、
・人々がねずみや猫のような動物のレベルにまで衰退し、互いを破壊しあうとき、
・不幸以外の何者もこの地上に見られなくなるとき、
・時代の終わり、ダルマの生命の終わりのとき、
宇宙普遍の教師、約束されたメイトラヤ、偉大な救世主、として仏陀は再来する。
この宇宙仏陀は法と正義をもってあらわれ、新しい、幸せな世界を創る。
数千の弟子たち、人々が世界中で彼の教義をよき言葉とよき行いで教える。

・未来の創造物は 30 年間大惨事に苦しむであろう。石になっていた巨人が目を覚まし、走り回る。神を忘れ、宗教を去った人々はお互いを破壊しあい、その激しさは、全土に血の洪水が流れるほどである。空からはあらゆる方向に火の燃えるものが降り続け、市や町を燃やし、人々は飢えに苦しむであろう。都会人は森に逃れ、田舎の人が都市に流れ込む。
首都は空からまた海から落ちる火のもので燃え盛る。軍隊が国々を支配し、正しさや正義はもはや人間の求める価値ではなくなり、うそが人間の生活を主導し、人々は正しいものよりうそを信じようとする。正しい人は愚か者とされ、洪水が人命を破壊し、王室の権威は失墜する。何千もの飛行巨体が何百もの火焔を空から人々の上に降り注ぐ。人々は物陰にもぐりこむ。聖地は 7 日間昼夜、暗くなるが、真理を崇拝するものは守られ、救われる。
おお、アナンダよ。われは仏陀のその時代に生きる人々に深く同情する。
　しかし、ダルマの促進者、正義の法の基礎を打ち立てるメイトラヤ　アミタブハ　ダーマカラヤ　ボ

デイサヴァ　がマシマ(中近東)から現れるであろう。月は輝きだして、ついに30年戦争は終わるであろう。難民は自宅に帰り、太陽は輝き始め、8つの気高い真理がすべての人の行いをつかさどるであろう。正義と親切の日々が世界を明るくするであろう。その日は新しい文明の日々と呼ばれる。その時代に生きるものは幸せである。2800人の献身的な僧が立ち上がり、全世界に新しいダルマを広めるであろう。おお、アナンダよ。われは仏陀のその時代に生きる人々に深く同情する。
われは、人々に未来の痛ましい災害を忘れぬよう、不注意でないよう今、警告する。
(サッタマ　ピタカ、タガニカヤ　vol.3 p89)

仏陀―弟子のサリプトラに語っております。

- 主は述べられた。'そのとき大洋は大半の水を失い、その結果、世界の支配者たちはその海を越えるに何の支障も無い。
- 人の中の最善者、メイトラヤはマントラを通して指導する84,000人の従者を持つ。これらの従者を従えて彼はある日、流浪の生活に入る。
- 彼はドラゴンツリーの下で悟りを得る。その枝葉は50のリーグ(同類)に膨れ上がり、その葉は6KOS以上に広く遠く広がる。その下で最善の人メイトラヤは悟りを得る。
- 神々の従者に囲まれてブラマも天の声で真理を会得し、宣言する。そして全地球がアラハツにおぼれる。アラハツのあふれる流れは乾く。自己の欠点をなくし、彼らを地上に結びつける。すべての絆を振り放し、喜び勇んで、神々も、人間も、ガンダハラ、ヤクシャス、ラクシャスも力強いドラゴンもこの教師を崇拝し、礼拝する。
- 彼は4つの真理を説明する。彼は信仰ある世代がそれを受ける準備があり、彼のダルマを聞いた人々は宗教に進歩をもたらすからである。彼らは美しい花園に集められ、その集まり（アセンブリー）は100連とつながり、メイトラヤの導きの下に、数百、数千の生きとし生けるものは宗教生活に入るであろう。
- 彼らはまた疑いをなくし、欲望は切り捨てられ、すべての煩悩、悲惨から自由となり、この世の大海を越える。メイトラヤの教えの結果、彼らは聖らかな生活を生きる。もはや彼らは何物をも自身のものとは考えず、所有物も持たず、金銀も家も親戚縁者も無い。しかし、かれらはメイトラヤの指導の下、聖なる生活を送る。(マハヤナ、ウパサカ、チママン　ND訳)
- メイトラヤの再来に関し、2つの点がこれらの予言に埋め込まれています。第1点はメイトラヤは新しいダルマを持った'偉大な救世主'であること。第2点は再来した彼の使命は地球和合、世界平和であること、です。

仏教には人間の寿命に関してメイトラヤの偉大さを説明する予言があります。

仏教宇宙観によると、地球は定期的な周期をたどる。周期によって改善進歩したり、退廃、衰枯したりする。人間の寿命は彼が生きている時代の質のしるしである。周期は10年から数千年の間で異なる。釈迦無尼の時代の平均寿命は100年であった。その後、世界の寿命はもっと短くなり人の寿命も短くなっている。罪と煩悩悲惨の頂点は、平均寿命が10年に落ちたときに訪れる。釈迦無尼のダルマはそのとき完全に人々によって忘れられている。

その後上昇運動が始まる。人の寿命が8万年に達すると満足した神々（ツシタ）の天国からメイトラヤが地上に現れる。その時代は特に実りの多い、繁栄のときとなる。

肥沃な金色の砂が地球の表面を覆い、あらゆるところに樹木や花々が咲き、清らかな湖や宝石が現れる。すべての人がモラル正しく、立派で、繁栄し、喜びに満ちて生きる。人口も多く、田畑は7倍の穀物を生産し、人々は価値ある行動を行う。

人々はメイトラヤの時代に再び人として生まれ、彼の教えの影響を通してニアヴァナを手に入れる。それは仏陀、釈迦無尼のものと類似している。というものです。

サンスクリット(仏教経典)でメイトラヤは善きこと、親切なる事を意味しています。バハオラの個人名フセインはアラビア語で"善きこと、親切なる事"の意味をもっています。

バハオラとは　‘神の栄光’を意味し、これはアミタブハ(無量光の仏陀)を意味しています。阿弥陀はサンスクリットではその出現が仏教徒によって待たれている5番目の仏陀です。
バハオラの称号について考えるとき、それが仏陀によって予言され、バハオラはその啓示の第一声を牢獄より上げられ、人類に向けてその使命を宣言されたその名声と栄光は、あたかも太陽が世界中を照らすように世界中の人々の心を照らし、彼らを神の栄光の礼拝にひざまずかせたことを思うとき大変興味深いものがあります。

その啓示についてバハオラは次のように述べておられます。
“地球の人々や一族にあらかじめ運命づけられていた時が来た。聖なる書典に記録されてきた神の約束が成就された。シオンより神の法が発布され、エルサレムの丘や地面は神の啓示の栄光に満たされている。危難の中のみ救いにおわし、ご自力にて存在される神のその書に顕されたことを熟考するものは幸いである。神の愛するものはこれについて深く瞑想し、神の世界を聞くことができるよう耳を澄ませよ。神の恩恵と慈悲により、変わることなき水晶の水を心行くまで飲むことができるよう、そして神の大業において山のように不動で確信を持ったものとなるようにわれは願う。”

仏陀―自分の欲している幸せは他人のために求めるべきです。(自分＝他人)
バハオラ――自分より兄弟を好むものは神の祝福を受けるものです。(自分＜他人)

仏陀―ヒンズー教の世の中（部族国家、村社会）を改善し、明確にするために遣わされました。仏陀のころは国々は王族によって支配されていたため、仏陀はその教えを持って国を導く賢い王となるよう知恵を授けました。仏陀の教えは僧侶によって広められました。
バハオラ―地球のすべての宗教を再生し、融合し、全人類の生命を再生し、世界を和合するために遣わされました。仏陀ほか他の顕示者とバハオラの大きな違いのひとつはバハオラのもたらした世界統合の行政組織にあります。今日、地球は神ご自身によって統治される地球時代となり、神は昼が夜になることの無い神の行政システムをバハオラを通して人類に示されました。今日、神は万国正義院をその行政システムの頂点に置かれ、世界の隅々まで広がる地方行政体とフィーストを通して世界の国々を導いておられます。その最終目的は地球文明、世界文明を築くことにあります。
バハオラは僧侶制度を廃止しています。今日、生きとし生けるものは皆、僧侶の言葉に頼ることなく、神の言葉を伝える栄誉を与えられているわけです。

仏教の予言に仏陀の時代は5000年続くとあります。しかし、女性が尼として僧院生活に入居を認められるための条件が記録されている物語があります。隔離された宗教生活に入ることを望んだ最初の女性たちの中に仏陀の妻と義理の母が居り、最初はこの望みは仏陀の承認を受けませんでした。しかし終に仏陀が許可を与えたとき、仏陀は‘この動きが仏教の周期を最初に定められていた5000年の半分、2500年に減年することになった’と述べられたということです。仏陀はこのとき、男女共に黄泉の国、地獄の森を掘り起こし、性欲を捨てて人々に、“精神的な人間”となることを呼びかけられました。仏陀は、女子の性質を述べて、“女子は短気で、情欲に満ち、羨みの心強く公的集会にその場所無く、商いを行うことができない。また、適職で生計を立てることもできない、仏教に帰依する婦人はすべてこのようであるが故、これがその障害を乗り越えて悟りを開く理由である。と述べられたといわれています。
バハオラの教えは、女性は女であるよりむしろ、理性を持った存在、一人の人間として認められています。バハオラは男女の平等を促進するだけでなく、男女両性は補い合う特性を持っていること、さらに、女性が真に解放されて男性と同等になるとき初めて世界に平和が訪れること、それまでは世界平和は確立されないと述べておられます。

仏陀は個人が精神的に悟りを得、魂がニアヴァナに到達することにより救われると説きました。バハオラは地球全体が救済されない限り、個人の救済もありえないとしています。バハオラは全体救済を目的とし、ご自身がすべての宗教の予言の成就者であると共に、全人類に共通するひとつの精神的教えを提供し、ひとつの平和な世界社会を実現し、世界文明を築くための新世界秩序を提供しています。その

社会は仏陀によって浄土とよばれ、ユダヤ・キリスト教によっては ‘神の地上の王国’ と呼ばれています。

分裂することの無い神の宗教

仏陀の教えは分裂からそれを守るべきすべを含んでいなかったため、大きくヒマヤナ（小乗仏教）、マハヤナ(大乗仏教)、ヴィラヤナ（チベット仏教）の 3 つに分派し、それが後に、高僧の出るたびに分裂を続け、今日、仏教宗派は世界 6000 余とも言われています。
バハオラは世界をひとつの神の下に統合し、分裂や戦争の無い平和な社会を築くために、また、神の世界行政システムに和合をもたらすため、聖約の法を定められたため、１６３年を経た今も分裂することなくひとつの社会として成長し続けています。

仏陀、ラマ、クリッシュナの教えは一般に多神教と見られていますが、バハイはユダヤ・キリスト教系と同じく、唯一の神を信奉しています。しかし、仏陀が多神教を教えたわけではありません。彼は一神教を教える卓越した精神的教師でしたが、後世の人間が彼が多神教を教えたかのようにその言葉を曲解した教義を作つたのです。(AB エジプトにて P86)

仏陀は‘神’という言葉を使わず、神を‘すべてのものの源、第一起源’と呼びました。一般的に仏教には‘神’の概念が無いと信じられていますが、仏教には‘仏、法、僧’があり、‘仏’（法身仏、報身仏、応身仏)のうちもっとも偉大な宇宙の摂理である神をほとけ(法身仏)という言葉で表しています。
法身仏＝真理（法）そのもの、無始無終の永遠の存在。キリスト教など一神教で言うゴッドやアラー（神）に相当する。仏教では毘盧舎那佛がこれにあたると推察されます。
報身仏＝有始無終の存在。阿弥陀仏や薬師仏などを指す。すなわち、バハオラを指すものと推察されますが、更なる研究が必要です。
応身仏＝有始有終の存在。法身仏＝真理（法）の化身として出現された仏。釈迦牟尼仏
ほか顕示者をさすと推察されます。

結 論

上記を踏まえて、仏教国でバハイを布教するための提案を述べてみます。

１．神の紹介

仏陀の初期の教えにかかわらず、今日、世界では仏教にはユダヤーキリスト教形で説かれている神の概念がなく、仏教徒の究極の礼拝の対象は絶対心意と真理を説いた仏陀であるとされているのが通説である。したがってバハイがこの 2 つの宗教について神の一体性を伝えるのは難しい。これについて万国正義院は、次のように述べている。
“新しい信者を教えるにあたって、神の概念の受諾を完全に除外することは不可能である。
なぜなら、私たちの聖典は神についての参照が多く、私たちの最も基本的な精神的活動、たとえば必須の祈りなどは神の受諾を必要とするからである。仏教徒にバハイ信教を教えるに当たって、重要なことは、バハオラが顕されわれた言葉そのものでアブドル・バハのコメンタリーでその主題と成った概念を伝えていくことである。祝福された美、バハオラは全てに力強き神を顕わすために数多くの言葉や定義を使われた。たとえば、‘内奥の精神の中の精神’永遠なる精髄の中の精髄‘目に見えぬ、不可知の精髄’無比なる主権者にして栄光に満ちた宇宙の支配者、無から全創造物を実体を創造したお方、永遠の過去から未来永劫まで唯一にして独立し、同等のものも友もなく、すべてを超越して立たれ、変わることなく、永遠に君臨し、自立したお方、” バハオラ、アブドル・バハの両者とも、神ご自身の究極の不可知の精髄についてまた、神の顕示者の生き方と人となりに神の実体が顕されていることをかなりの長文にわたってさまざまな方法で説明している。それゆえ、神を信じているかどうかを聞く代わりに、布教者は主題についてのバハイの教えを詳細に説明して探求者がそれを受け入れるかどうかを確かめる方が効果が上がるのである。(万国正義院、1991 年 2 月 13 日個人にあてて)

2．地域専用語

万国正義院は、バハイを伝えようとしている相手の使用し、理解する言葉を使うことの重要性について述べている。“新しいバハイには西洋の考え方、やり方を押し付けるのではなく、彼らの使う言語や地域の専用語を使ってその理解が深まるよう教えることはバハイのやるべき大切な仕事である。”　(万国正義院、1984年12月12日個人に宛てて)

3．バハオラの教えは、過去のすべての宗教の至高の望みを表したものである。

特定の歴史的文化的内容がバハイに影響を与える一方、バハイの教えはほかの世界、ほかの時代にもまた、誰にでも境界を越えて通用する。

ショーギ・エッフェンデイはある仏教僧の相談に答えて次のように述べている。

“仏教僧としてバハイを伝えるか、この形骸化した仏教から完全にあなた自身を自由にし、仏陀の教えを生きて具現化したバハイ信教のアクテイブなメンバーとなるかはあなた自身が決めることである。事実、仏陀を顕示者として信じることなくバハオラを信奉することはできない。(1952年2月4日、個人に宛てて)

アブドル・バハは“バハオラの教えは世界中のすべての共同体が、それが宗教的、政治的、道義的であろうと、古来、または、近代であろうと、彼らの至高の望みを表したものである。(アブドル・バハ選集1982、英語版p304)

4．文化的見地から　— 各国はそのユニークな歴史的遺産を持ち、長期にわたってはぐくまれた伝統文化を持ち、それを通して独自の価値システムを築き上げ維持してきている。

我々が、受け入れられるためにはその国の見地からアプローチしなければならない。そして、一旦、受け入れられたならば、すべての人間に内在する神聖なる者、共通する価値観を土台として前進することができる。

5．類似点を確認する。— 全知全能の神の実体と教えを説明するためにはバハオラとアブドル・バハの使われた言葉や定義を調べることが重要である。この調査が仏教徒とバハイとの観点の間の共通点を確認する助けとなる。(バハイ世界センター、聖典研究部メモ1993年12月15日) 上記の試みはこの一部として提供されている。この類似点を通してバハオラの教えが仏陀とのつながりを通して仏教徒に理解のきっかけを与える。

6．聖典の力—探求者を直接聖典の言葉へと導き、彼らがその生きた、魂を開放するエネルギーにふれる事を助けることは重要である。バハオラは‘彼のペンの動きを通して’‘一つ一つの言葉に新しい威力を浸み込ませた。’と述べている。

7．社会経済開発の必要性

各国の社会経済開発の必要性に緊密に呼応したトピックはその国の人に訴える力がある。たとえば、教育の役割、人間の特質、男女の特性、モラルや美徳の重要性、家族生活、科学と宗教の調和、その他の現代社会の抱えるトピックなどである。(万国正義院、1991年3月4日)

最後に仏陀についてアブドル・バハが語った言葉を引用してこの文を閉じたいと思います。

仏陀は弟子たちを伝教のため外へ出したいと思われました。そこで仏陀は教えた通りに弟子たちが伝教の準備ができているか試すため質問をしようと思われました。仏陀は尋ねました。‘あなた方が、西へ東へと出かけていくと人々が戸を閉めてあなた方に話したくないと言ったらあなた方はどうしますか？’弟子たちは答えました。‘私たちは人々が私たちに危害を加えなかったことに感謝いたします。’‘それでは、彼らが危害を加え、あなた方を嘲り笑ったらどうしますか？’‘私たちは人々が、それよりひどい扱いを与えなかったことに感謝をします。’‘もし、彼らがあなた方を牢獄に入れたら・・・？’

‘私たちは人々が、私たちを殺さなかったことに感謝をします。’‘もし、彼らがあなた方を殺そうとしたら・・・？’‘それでも’、弟子たちは答えました。‘私たちは殉教者にしていただけたことに感謝をします。’‘神の栄光のために殉教する、これ以上の至上の栄光に値する運命がこの世にあろうか？そこで、

仏陀は言った。'準備は完璧だ。'
（アブドル・バハ　ロンドンにて921年　57-58頁）

日本仏教を発展させた五聖

角井宏

（はじめに）教条主義には発展がない。日本仏教も、時世と環境に応じて柔軟な教義の適用を怠らなかったので、ここまで発展してきたといえる。仏教公伝以後　誰がどのように仏教を変えたかを概説するのが、小論の課題である。

1 聖徳太子

仏教公伝時の欽明天皇の孫で、それまで氏族連合の盟主に過ぎなかった大和王朝を強国な集権国家に育てるために、十七条の憲法で「和」及び「承詔必謹」と並べて、「三宝」を敬えと命じ、王法一如・神仏一体の思想を通じて、諸法実相・革命容認の朝鮮仏教を天皇中心の護国仏教化し、むしろ為政者に訓戒を与えた。

2. 聖武天皇

聖徳太子の王法一如・神仏一体思想を全国に広め、具象化するため、諸国に国分寺・国分尼寺の創立を命じ、大和国分寺である東大寺に毘盧舎那仏を作り、伊勢神宮寺を発願し、神仏習合を掲げる宇佐八幡を昇格させ、国家仏教の最盛期を迎える中で、民衆仏教指導者行基や、知識立寺を唱える良弁を登用した。

3. 空海（弘法大師）

王法一如・神仏一体の象徴たる毘盧舎那仏（大日如来）を天照大神の垂跡（化身）とする真言密教の理論を開発し、律令国家の基礎制度である班田収受崩壊の中で進みつつある新興の荘園の内部に芽生えた契約社会の倫理（主従）を確立、新たな荘園仏教、武家社会の道徳律を構築した。

4. 親鸞

仏教を阿弥陀一神教に変容させ、農村を中心に、易行・悪人正機の念仏仏教を広め、主従倫理を重んずる戦闘集団（一向一揆）を導いた、農村民衆仏教の開祖。念仏本願を貫き、浄土真宗を守るため、長子善鸞を義絶した。一向一揆の団結力はしばしば武家の棟梁を脅かした.

5. 日蓮

念仏無間（念仏すれば地獄に落ちる。）・立正安国を唱え、極楽往生という来世願望を、現実社会の建設に変質させ、都市を中心に弾圧に抗しつつ、法華仏信仰（一神教であることに注意）を広めた。温泉客や社寺見物客には会わず、日蓮を刺客から護った恩人にも不信心という理由で見舞わないという厳格な態度を持したという。